

成果の説明書

(氏名) 黒川基裕	(学部) 地域政策学部
<p data-bbox="264 248 432 282">1 重要事項</p> <p data-bbox="288 365 751 398">当該年度は、下記の研究を推進した。</p> <p data-bbox="264 477 517 510">1. 米麺の製法研究</p> <p data-bbox="264 533 1370 734">今年度よりベトナムの観光資源開発研究から派生した米麺の製法に関する研究を推進してきた。これは、ベトナムやタイ国で採用されている製法を超えてさらに簡便な製法を開発すること、また性質の異なる日本米でも米麺をつくる製法を開発することを目的としている。</p> <p data-bbox="264 757 1370 958">2022年8月と2023年2月には、ハノイ及びバンコックでのフィールドワークを実施し、BunやPhoの製法についての全体工程を把握し、簡便化するポイントを検討することに注力した。8月に得られた知見を踏まえて、2月には更に踏み込んだ調査・観察をすることによって製造上の急所もかなりクリアになった。</p> <p data-bbox="264 981 1370 1126">現地では、麺の製法とともに米の品種と製麺の関係性についても情報収集・サンプル採取を進め、研究室での実験の充実を図った。ここでは、なぜ日本米で製麺が難しいのかについて検討が進み、今後の製法開発に役立つ知見が得られた。</p> <p data-bbox="264 1149 1370 1238">ベトナムでは、Vietnam National UniversityのHa教授の研究グループとの関係構築が大きく進展し、今後も引き続き共同研究を推進していくことで合意できた。</p> <p data-bbox="264 1261 1370 1406">また当該研究を途上国におけるアグロインダストリー振興という枠組みで位置付け、科学研究費研究「アグリビジネス能力向上によるアフリカ農村部の包摂的開発可能性の研究」の中で米麺のアフリカ展開の可能性についても研究を進めた。</p> <p data-bbox="264 1485 715 1518">2. 無煙クッキングストーブの開発</p> <p data-bbox="264 1541 1370 1742">継続研究となっている無煙クッキングストーブの開発に関しては、本年度に新たに火力を調節できるプロトタイプ的设计・試作・実験を推進した。最終的には、現地投入できるモデルを確立し、2022年9月のインドネシア・バンテン州3村でのフィールドワークで住民へのデモンストレーション、留置法による消費者使用テストを実施した。</p> <p data-bbox="264 1765 1370 2022">当該研究では、これまでにミャンマーをフィールドとして実証実験を繰り返していたが、政変とCOVID-19の蔓延の影響で、今年度はインドネシアをフィールドとした。現地では、ミャンマーと同様レベルで潜在需要が確認できた。またこの結果については、インドネシア政府Ministry of Cooperatives and SMEsも高い関心を寄せており、ペレットの製造・デリバリも含めた実証実験について協議を続けることとなった。</p> <p data-bbox="288 2045 1370 2078">当該研究に関連する成果として、国際開発学会の研究部会において下記の報告を実施</p>	

した。

黒川基裕 (2022) 「BOPビジネスの実現に向けたField-based approachの実践」 国際開発学会・第2回アジア・アフリカにおけるものづくり研究部会報告

3. ヒ素除去対応型の浄水器開発

昨年度から進めてきた自然由来のフィルターの研究、ミャンマーのライフスタイルを浄水ボトルの設計、循環型経済モデルを念頭においたビジネスモデルの設計を推進してきた。浄水性能については、ヒ素に加えて大腸菌の除去についてもスコープとなるかどうか検討してみた。研究成果の一部は、下記のとおり公表された。

黒川基裕・塚越風渡・柴田蒔尋・潮未紗・キン・サンダー・ティン・田島創 (2022) 「ミャンマーにおける浄水需要と個別家庭アプローチの適合性」『第26回アジア地下水ヒ素汚染フォーラム 講演要旨集』: 9-14

2 その他の事項

学内では、国際交流委員会の委員を務めた。

3 次年度以降の計画・抱負

米麺研究では、アフリカへの展開可能性についてさらに検討を進め、可能な範囲で現地での実証実験に結びつけたい。また、これまでの成果を含めて、VNUの研究者とともに論文報告を実施できるように成果をまとめていきたい。

無煙クッキングストーブに関しては、大きな成果が挙げられたインドネシアの実証実験の拡張できるよう検討を進めていきたい。

浄水器開発については、熟度を高めていき、現地投入できるプロトタイプ製作にたどり着けば、実証実験を遂行したい。